

令和五年 年頭所感

葬送文化の本質に立ち返る



東京都葬祭業協同組合
理事長 濱名 雅一

あけましておめでとございます。

「卯」という字は左右に開かれた門の形に由来する
そうで、卯年は閉じていた門が開いて「飛躍する」年
と言われています。長らく低迷する日本経済について、
誰もが現状打破を願っていますが、当面は一気に飛躍
とはいかないようです。

昨年の秋から今年初めにかけて、都内の大手百貨店
が再開発によって相次いで閉店し、さらに海外ファン
ドへの売却も発表されました。新宿、渋谷、池袋の主
要ターミナルから周辺都市にまで広がっているのは、
コロナ禍による長期閉店を機に、ビジネスそのものを
見直した結果ゆえの判断なのでしょう。さらに現在営
業している百貨店の中にも、「商品を売らない店」の
面積が徐々に拡大しています。フロア店員数の少なさ
にも接客スタイルの変化を感じますが、これらも新た
な収益構造を模索している途上なのかもしれません。

* * *

コロナ禍から三年が経過し、私たち葬祭業界も変化
を余儀なくされています。三密を避けるべく、多くの
葬儀式は身内のみとなり、急激な小規模化・簡略化が
進んでいます。参列者の大幅な減少は葬儀社をはじめ、
関連事業者にとっても大きな打撃となりました。その
一方では、死亡人口の増加から未だに「葬祭業は成長
産業」とする総務省の見解や、終活という言葉の定着
による世間一般の認知度アップもあります。市場規模

の縮小については、実感値も含めて正しく分析したう
えで、百貨店業界のように大鈍を振るべきなのかを
見極め、適切な策を講じなければなりません。

この三年でさまざまなオンライン化が進み、多くの
企業では在宅勤務が導入されましたが、大企業を中心
に再び出社勤務に戻す動きがあるそうです。対面の方
が社員同士の会話が弾み、コミュニケーションによっ
て新しいアイデアが生まれ、若手社員にとっての安心
材料にもなるのだと識者は指摘しています。興味深い
のは、この傾向は日本だけでなく、欧米の企業も同様
に出社勤務へ切り替えているという点です。人と人と
のつながりには、経済の効率化だけでは図れないプラ
スアルファの力があるのだとすれば、葬祭業界の近未
来は葬儀式のオンライン化を目指すのではなく、たと
えこれまでと形式は変わっても故人を偲び縁者が集う
という葬送文化の本質を、私たち葬儀社が決して失く
してはならないということではないでしょうか。オン
ラインやインターネット社会が万能ではないことを肝
に銘じ、私たちの店舗や対面によるサービスが皆様に
信頼され、安心していただけるよう、気を引き締めて
一層の精進を重ねてゆく所存です。

この難題を解決するには、組合員をはじめ関連団体
の皆様、協賛会の皆様の御支援が大きな力となります
ので、本年も倍旧の御指導御鞭撻の程、よろしくお願
い申し上げます。